中国朝鮮族のトランスナショナルな移動生活
―― 在韓出稼ぎ女性のライフ・ヒストリーから ――

許　　燕　華

1　はじめに

現在、中国はあらゆる面で現代世界のグローバル化の最前線といってよいだろう。なかでも中国朝鮮族[1]は、このグローバル化の波に乗って、中国国内はもとより海外への人口移動を非常に活発に行っているエスニック集団の1つである。120万人の中国朝鮮族を抱えている吉林省は、彼らの活発な移動により、特に国際移動では、中国全国順位が2位までに上昇し、福建省の次に国際移動が活発な地域になった[2]。経済成長率からみると、吉林省は中国全国一になる。福建省の人口移動は従来から存在したのに対し、吉林省は改革開放20年の間、特に中韓国境成立以降急激に増えたものである[3]。歴史的にみると、1970年代末まで、中国朝鮮族が集中している吉林省は人口移動の純受入地域であった。しかし、中国の経済体制改革以後、旧工業区にあったさまざまな問題が吉林省の労働力流出の重要な要因となった。特に、1990年代の国有企業改革以後、吉林省の労働力流出が加速化してきた（韓 2010）。国内移動先としては北京、上海、青島など東部沿海地域へ、海外移動先としては韓国、日本、北米、ロシアへ移動している（韓 2006）。

特に海外への移動では、中国朝鮮族の韓国への労働移動が、その規模と特性により注目を浴びはじめている。現在、在韓中国朝鮮族は45万人を超えており、これは中国朝鮮族総人口の2割、海外移動者の6割、在韓外国人の3割[4]を示している。

1990年代から、中国の人口・労働移動に関する研究が盛んになっているが、民族に焦点

---

(1)「中国朝鮮族」とは、中国籍を所有し、朝鮮民族の血を引き、しかもその文化を所有しているエスニック集団を指す。人口約192万人で、在米コリアンと並んで、朝鮮半島以外では最大級の朝鮮民族コミュニティである。中国国内の分布は中国東北部に集中し、なかでも吉林省に約120万人が居住し、吉林省南部の延辺朝鮮族自治州（首府延吉市）に約81万人が集中している。

(2) 2000年中国第5次人口センサス資料を参照せよ。

(3) 1990年と2000年の全国人口センサス資料と吉林省人口センサス資料を参照せよ。

(4) 2011年6月30日の韓国出入国・外国人政策本部「国籍別在留外国人現況」と中国第5次人口センサスの資料をもとに筆者が計算したもの。

を当てた、地域に関する研究は少ないのが現状である。人口移動を分析するマクロデータとして全国人口センサス資料がよく使われているが、少数民族の労働力移動に関する詳細なデータを入手することが難しく、アンケート調査、聞き取り調査などミクロ的研究が不十分である。在韓中国朝鮮族の研究では、ソル・ドンフンが1999年と2000年出版した『外国籍労働者と韓国社会』と『労働力国際移動』が初期の代表的先行研究で、ソルは中国朝鮮族を外国籍労働者として取り上げ、外国籍労働者移住背景、移住プロセス、韓国政府の政策について詳しく分析した。彼の研究は初期の研究者の参考資料として意味があるものの、受入国中心的な視点という制限があった。朴光星は、2003年と2006年修士、博士論文で、国際労働力移動とトランスナショナルな移動の視点から、在韓中国朝鮮族労働力及び全体の中国朝鮮族社会変化に対する系統的な研究を行った。また、権太燗・朴光星の「国内朝鮮族社会適応と政策：朝鮮族労働者集団の形成」（朴2004a）と「中国朝鮮族大移動と共同体の変化：現地調査資料を中心に」（朴2004a）は送出国での現地調査の代表的な研究である。彼らの研究は、改革開放以降の人口移動による社会の変化様子を広く取り上げることで、その後の研究発展に基礎的な役割を果たしたと思われる。しかし、全体の朝鮮族の移動研究からみると、アイデンティティをめぐる研究が多く、また家族に関する研究は危機論的な悲観的視点が主で、まだ充分とは言えない。

本論文の目的は、中国の現代を生きる一朝鮮族女性のライフ・ヒストリーに焦点をおき、そのなかで彼女が自己をどのように形成・再形成され、どのように家族・他者・社会とつながり、またどのようにさまざまな困難・危機を切り抜けて生きていくのかを記録にとどめることを通じて、現代世界のグローバル化のなかで、短期間のあいだに、トランスナショナルな移動生活を身につけた中国朝鮮族の生活世界を明らかにし、そこで生き抜く困難と技法を明らかにすることである。

方法としては、ひとりの中国朝鮮族女性の生活史を長い間深くインタビューするライフ・ヒストリー手法を取る。ライフ・ヒストリーは、極めて主観的であることで、妥当性・信頼性がないという批判がある。しかし、歴史学者の書いた「歴史」にしても一般に歴史家が歴史学界における承認を期待しそれに備えつつ、彼自身の主体的に把握した、彼自身解釈にもとづく「歴史的現実」を記述した作品にほかならない。

> 社会史とか文化史と呼ばれるものは、本当は普通の一人ひとりの個人生活史が重複し、力動的に連関し合って相互作用し、それらが全体社会の、国際的、国内的、地方的な各レベルでの動的構造と規定し合いながら、歴史が展開することを捉えなければ充分ではない（中野　2003）。

ライフ・ヒストリー研究法は、個人のパースペクティヴ、すなわち価値観、状況規定、

社会過程の知識、体験を通して獲得したルールなどにアクセスする方法である（中野・桜井 2002)。そのなかで、ひとりだけ取り上げる手法は、ライフ・ヒストリー研究者のなかでさえ、ひとりだと特殊かもしれないから、ひとりの聞き書きでは研究にはならないと考えている学者もいる。しかし、中野卓（2003）によれば、個人のなかには常に社会があり、どんな特殊な個人であってもそのなかには社会が内面化されているので、個人を徹底的に深く掘り探れば社会的な研究に成りえるのであると述べている。個人と社会は相互に規定するものであって、社会を規定するものである個人が、同時にまた社会によって規定される個人なのであるかぎり、特定の社会集団のモノグラフ的研究を通して全体社会へ接近する方法が可能であると同様に、特定個人のモノグラフ的研究を通して、人間個人から全体社会へ接近する試みも可能である（中野 1981)。また、小林多寿子（2002）によると、ライフ・ヒストリーは、インタビューの場から生まれるもので、語り手と聞き手との相互作用のなかで共同制作されるものだという。インタビューからライフ・ヒストリーへというプロセスは、インタビューでの主体である語り手とライフ・ヒストリーを構成する主体である聞き手という二つの主体の間で解釈の主体が移行していくプロセスであり、そこは相互作用の現場である。

今回研究対象である中国朝鮮族集団は、中国社会でも韓国社会でもマイノリティとして、基礎的な統計資料さえ整備されていない状況である。また、不法滞在者という身分と、仕事に対する劣等意識のため、中国朝鮮族同士のネットワークのなかで生活することが主になっている。ライフ・ヒストリー調査は昔から、どちらかといえば主流からはずれた人を対象にしてきたが、中国朝鮮族出稼ぎ労働者の問題を考えていこうとするときに、まさにこのインタビューの場を抜きに語ることはできないのではと思ったのである。

本論文の意義としては、トランスナショナルな（多元的な）生活世界をひとりの人間がどのようにしてつなぎ合わせて生きていくのかを明らかにすることを通して、グローバル化のなかの人間像を理解することである。ライフ・ヒストリー法を使い、ミハという個人の生活体験を取り上げているが、その体験は決して独立したものではなく、その周辺世界のさまざまな部分と幾重にも関わりあっている。中国での市場経済導入以降、無数のミハが体験した中国の現代及びその生活世界に深く入り込み、その真実に迫ることで、個人が自己、他者、家族、社会をどのようにつなぎ合わせていくのかを明らかにすることを通して、グローバル化のなかで変動する社会及びそのなかを生きる人間像を理解するのに役に立つ。生活世界のなかから体得された含蓄ある生の声に接して、個人が社会のなかでいかなる存在の重みを持っているかが分かり、無名のひとたちのなかにも偉大な存在が見いだされる（石原 2002)。

2　韓国における中国朝鮮族

現在、海外に移動した中国朝鮮族は約60-65万人と推算されているが、その内訳は韓国42万人、日本5～6万人、北米8万人、ロシア2～3万人、ヨーロッパ連合及びその他の国と地域1～2万人と考えられる（朴2010）。

図1は1999年から2011年までの韓国で外国人登録[5]している中国朝鮮族数と全体外国人のグラフで、韓国出入国外国人政策本部1999年～2011年「出入国統計年報」をもとに筆者が作成したものである。

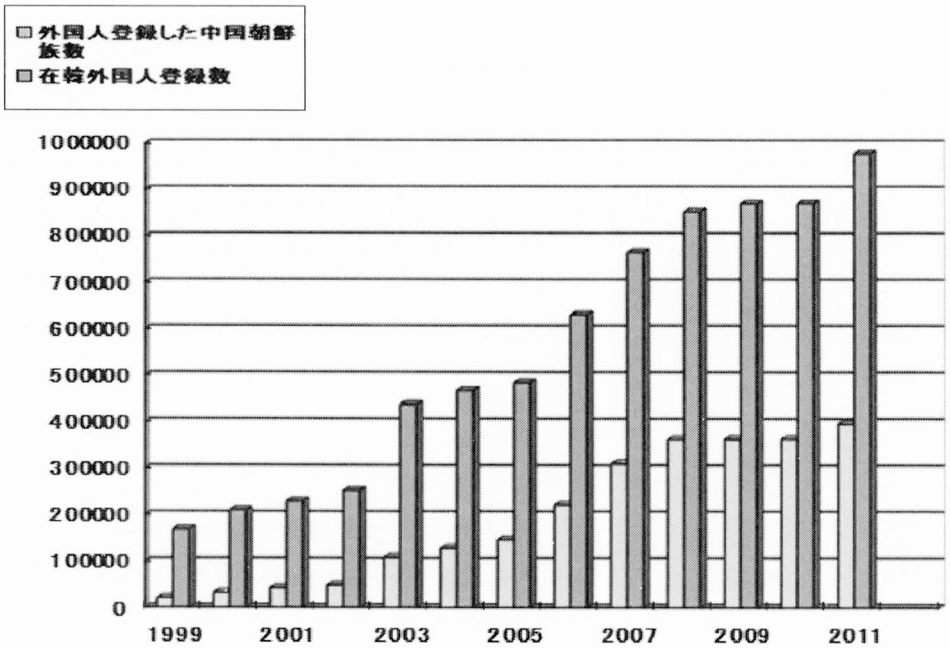

図1　1999年－2011年長期滞在の中国朝鮮族と在韓外国人

図1により、同じ年の全体の在韓外国人登録数と比べてみると、中国朝鮮族の割合の高さが分かる。在韓外国人長期滞在者は2011年には100万人に達しようとしているが、そのなか中国朝鮮族滞在者は在韓外国人総人口の4割を占めている。

ところで、どうして中国朝鮮族の大多数が韓国を選ぶのか。そこにはどのような要因が作用しているのか。

---

[5] 外国人登録した人は、90日以下の短期滞在者を除いた長期滞在者を指す。

中国朝鮮族の韓国への出稼ぎ要因には、経済的、空間的、文化的、社会的、心理的など諸要素が作用している。

詳しく言えば、経済的要因には、期待賃金格差と送出側就職環境が含まれ、空間的要因にはその近隣性による移動しやすさが挙げられる。文化的要因としては、言語的に朝鮮語を話せる中国朝鮮族がコミュニケーションにおいて不便がなく、文化的に近く、親和性を持っている点である。初期の移動者と現在の移動者、それから移動者個人によって差はあるものの、文化的要因は韓国への移動ならではの重要な要因であると言えるだろう。社会的要因としては、友人・親族など各種ネットワークの存在とその役割、及びそれによる移動の容易性が含まれる。心理的要因というのは、流行性・大衆心理(権 2011: 161)、たとえば、みんなが出るから出るという心理が挙げられる。最後に、社会的要因としては、友人・親族など各種ネットワークの存在とその役割、及びそれによる移動の容易性が含まれる。

一方、韓国側の労働力不足と移民政策・同胞政策のような要因も重要である。このような受入側の実情が、朝鮮族人口の韓国への移動の吸引要因として作用している。

表1は韓国移民政策及び在韓中国朝鮮族状況を表にしたものである[6]。

表1でも分かるように、1986年ソウルで開かれたアジア大会と1988年のオリンピックなど一連のスポーツ行事を通じて韓国と中国の関係が改善し始めた。両国関係が改善されたことにより、韓国の「中国朝鮮族離散家族捜し」を通じて確認された家族を中心に中国朝鮮族の韓国訪問が行われ始めた。1986年からKBSラジオ社会教育放送は中国朝鮮族を相手にした離散家族探しプログラムを製作・放送したが、これは中国現地でも視聴することができた。この放送を通じて多くの親族の存在が確認できた。韓国政府は簡単な旅行証明書だけで彼らの韓国訪問ができるようにした。この時、親族の呼び寄せにより香港を経由して韓国を訪問した人々が、中国朝鮮族として初めて韓国の地を踏んだ人々になるのである。彼らを通じて韓国の発展した姿が中国朝鮮族社会に知られ始め、韓国の人々が中国の漢方薬を非常に好んでおり、これを持って行けば多くのお金を儲けることができるという情報も伝わった。この後から訪問する人々は多くの漢方薬を持って入国し、これを売って多くのお金を儲けるものもいた。これが「コリアン・ドリーム」を中国朝鮮族社会に抱かせるようになった（朴 2006)。

---

[6] 2010年10月29日外国人移住労働協議会セミナーでのキムヨンピル（中国同胞タウン新聞編集局長)「中国同胞政策の限界と提案」をもとに補助編集したものである。

表１　韓国移民政策及び在韓中国朝鮮族状況

年	政策・法律	在韓中国朝鮮族状況	社会状況及びその他
1986	・ 簡単な旅行ビザで親戚訪問が可能になる。	・ 親族訪問短期滞在(就労認めない) ・ 親戚訪問60歳以上可能	・ 豊かな韓国をメディアでみた中国朝鮮族 ・ 離散家族探し ・ 漢方薬商売の広まり及び取締り
1990	・ 韓国・仁川と中国・威海を結ぶ海上航路が開かれる。	・ オーバーステイなど不法滞在急増	
1991	・ 産業研修生制度導入(11月)		
1992	・ 中韓国交成立(8月24日)	・ 中国朝鮮族入国急増 ・ 親戚訪問55歳以上可能	
1993	・ 対象拡大(11月)	・ 12万人以上の中国朝鮮族入国	・ 産業研修制度上の人権問題などが原因で離脱者増出
1999	・ 在外同胞法制定(8月)	・ 不法滞在多数 ・ 同胞法から除外されていた中国/旧ソ連同胞追加	・ 憲法訴訟／在外同胞法の同胞差別論
2002	・ 不法滞在者総合防止対策(3月～5月) ・ 日韓ワールドカップ特別政策で自己申告者自由就労活動が可能になる。	・ 自己申告不法滞在者は、2003年3月31日まで出国猶予。朝鮮族10万人自己申告。	
2004	・ 在外同胞法改正(4月)		
2005	・ 同胞帰国支援プログラム実施(3月～8月)	・ 非合法滞在者10万人中、5万8千人自主帰国	・ 中国朝鮮族の韓国政府対策に関心と期待高まり
2006	・ 同胞帰国支援プログラム(4月～8月)	・ 非合法滞在者5万人中、2万6千人自主帰国	・ 韓国政府に対する信頼回復と中国朝鮮族意識変化
2007	・ 産業研修制度中断、雇用許可制に一本化(1月1日) ・ 中国、旧ソ連同胞対象にサービス業などで就労が可能な訪問就業制施行(3月)	・ 韓国に戸籍・親戚がない無縁故同胞3万人新しく入国	
2009	・ 中国、旧ソ連同胞にも在外同胞滞在資格F-4ビザ発行拡大	中国朝鮮族F-4 滞在者増加	・ 4年大学卒業者、企業管理職者、中国政府公務員及びその両親・配偶者・子供に発行するビザ。5年ビザ、3年更新その間自由に韓国往来可能

初期の訪問者による漢方薬の搬入が増えるなか、偽の薬剤が流通するなど問題が起こり始めた。それに対する取締りの結果、漢方薬販売が下火になったが、一方で労働を目的にする入国が増加し始めた。違法就労によって合法的な親族訪問滞在者たちも不法滞在者となった。

中国朝鮮族たちの流入が増え、彼らに不法滞在の兆しがみられるようになると、韓国政府の中国朝鮮族訪問に対する見方にも変化が生じた。 1990 年からは、中国朝鮮族は中国国籍で査証の発給を受けないと入国ができないようになった。1992 年には、中国の国民に

対する査証発給業務が外務省から法務省に変わったが、この後、新しい査証発給指針に従い中国朝鮮族の親族訪問は55歳以上に制限され、短期滞在ビザにもこの指針が適用された。これは中国朝鮮族の入国経路が以前に比べて狭くなったことを意味する。合法的な入国経路が狭くなるにつれ新しい入国方法として台頭したのが、中国朝鮮族女性たちの韓国男性との婚姻による移動である。婚姻は本人の入国はもちろん親の呼び寄せも可能であるため入国を願う人々には一石二鳥の方法であった。

韓国政府の入国制限にもかかわらず、中国朝鮮族の入国は減ることなく、むしろその数は増えていった。漢方薬締りの後は、密航、偽パスポート、偽結婚、「空港逃げ」、産業研修生、第三国経由入国の方法で韓国へ入国し、「非合法滞在者」「外国籍出稼ぎ者」として韓国の3K業種である工場、飲食店、家事手伝いとして働いていた。

不法滞在労働者数が増加し、また滞在が長期化することによって、外国人労働者不法滞在問題が韓国社会の新しい社会問題として浮び上がった。法務省の発表によれば2002年5月時点で韓国に不法滞在している外国人労働者数が28万5千余人に達した。中国人が15万人を占めたが、なかでも中国朝鮮族が約10万人に及んだ。中国朝鮮族の場合、言語と文化に関して問題がなく、友人・親族ネットワークがあるため他の外国人労働者に比べて「非合法滞在」になりやすい。

1999年在外同胞法が正式に制定されたが、中国と旧ソ連同胞を排除した「同胞差別法」議論と憲法訴訟などが起こり、2004年4月中国と旧ソ連同胞を含めた改正案が制定された。2009年12月1日　中国・旧ソ連同胞にも、在外国民及び「出入国管理法」第10条の規定による滞留資格中の在外同胞滞留資格F-4ビザ発行が拡大することになり、2011年4月再改正を経て、現在このF-4ビザで滞在する中国朝鮮族は9万人近くいる。在外同胞法は、国外に永住する韓国民や外国籍を取得している全韓国系同胞の経済力、技術力その他社会文化的影響力を韓国社会に活用することを目指した、血統主義に依拠した制度である。この法律[7]によって、韓国国内居所申告をした外国国籍同胞には、滞在期間内の自由出入国、就労での優遇、90日以上滞在する場合健康保険適用可能、不動産取引での韓国国民同等な権利を有するなど諸権利が与えられる。

また、2004年3月雇用許可制により韓国での各国からの「非合法滞在者」約18万4千人が合法化されたことで、すでにサービス業などで働いていた中国朝鮮族7万人2千人も合法化されることになる。その後の2005年、2006年2回の同胞支援プログラムにより、

---

[7] 詳しくは韓国2011.4.5. 法律第10543号＜在外同胞の出入国及び法的地位に関する法律＞一部改正を参照せよ。

中国朝鮮族の「非合法滞在者」数は2011年現在2万人[8]まで激減している。2007年3月中国・旧ソ連同胞を対象にサービス業などで就労を許可する同胞優遇制度――訪問就業制施行により、2011年現在このビザを持っている中国朝鮮族は28万人を超えており、この訪問就業H-2ビザは一番多く利用されている。

以上、述べたように、中国朝鮮族の韓国への移動には韓国の移民政策及びその変化と密接に関係している。

3 ひとりの中国朝鮮族出稼ぎ者ミハの個人史

この中国朝鮮族の高い人口移動率の結果、国境をまたいでひとりの人間が複数の国民国家内で異なる生活世界を構築していくことになる。こうした状況を考察するためには、ひとりの個人のミクロな生活経験に密着していく必要がある。そのために本稿では、延辺自治州で生まれたひとりの女性の移住史に注目することにした。

本論文の資料は、2003年9月から2005年まで韓国の安山とソウルのガリボンドンへの4回のフィールドワークと、2003年から2010年までの個人インタビューを通じて収集されたものである。まず、ソウルでの4回のフィールドワークを通じて、在韓中国朝鮮族のさまざまな内部事情について理解を深めることができた。聞き取り調査は、2003年9月から性別・年齢・渡韓年代を問わず、ガリボンドンと安山の料理店に通っている中国朝鮮族にインタビューを行った。調査対象は、男5人、女5人である。年代別にすると、50代が2人、40代4人、30代3人、20代1人である。20代の女性1人が移住して3年で、それ以外の人は、みな5年から10年の韓国滞在であった。韓国に移住する前の背景や移住経路などは各自異なるものの、お互いによく似た出稼ぎ生活を送っている。そのなかで、調査対象をミハというひとりの女性に絞り、ライフ・ヒストリー法で、マクロな社会背景とミクロなミハの生活を関連させることを試みた。私がミハというひとりの女性に絞ったのは、彼女の国内出稼ぎ生活・2回にわたる異なる国外への出稼ぎ生活という経験からもっともインパクトを与えてもらったからである。ミハとの出会いは、2003年9月、韓国を訪問した際、知人から紹介してもらった。2004年11月前までは、韓国でインタビューをし、中国に帰った以降からは、国際電話とインターネットを通じてインタビューを続け、現在まで至っている。表2はミハの移動年表である。

---

[8] 詳しくは、韓国法務部出入国外国人政策本部の2011「出入国・外国人政策統計月報」1月号を参照せよ。

表２　ミハの移動年表

1963年	延辺自治州和龍市の某農村生まれ
中学校中退後	農業を手伝う
1986年	都市へ移住（延吉市）
1989年	結婚→翌年娘誕生
1992年	夫が会社潰れた後ロシアへ
1993年	夫を追ってロシアへ
1994年	夫婦ともロシアから帰る
1995年	産業研修生として単身韓国農村へ
1996年	「非合法滞在者」として都市へ
2004年	帰国（11月）
2008年	夫婦で韓国へ再出稼ぎ

ミハは、中国吉林省延辺自治州和龍県[9]のＭ村生まれで、学歴は中学校中退である。1986年に農業を手伝っていた農村を離れ、小都市である延吉へ出稼ぎに出て、一番上の姉の紹介で、延吉市のある工場に就職した後、同じ出稼ぎ者である夫と結婚し、1990年に娘が誕生した。

3-1 ロシアでの出稼ぎ生活

中国で改革開放が本格的に始まると、最初中国朝鮮族は北朝鮮と取引きした。これはすけそうだらの干物を含む海産物を中心にした商売であった。しかし朝鮮の経済力の限界により非常に難しい商売だった。そこで、1989年中ソ両国パートナーシップ全面回復の協定により中ソ関係が改善されてからはソ連との取引きが活発になった

1993年には、延吉にいる一番上の姉とともに、夫を追ってロシアへ向う。当時、ロシアは政変[10]直後であったため、地域間、民族間紛争が激しかった。また、旧ソ連時代重工業を重視したため、軽工業はあまり発展していなかった。人々は日常用品特に衣類を求めて、中国、ベトナムなどから来た商人の売り場を訪ねていた。ミハらも旅館に住みながら市場で行商して暮らしていた。その間、娘の面倒はミハの母が見ていた。

次に見るのはロシアでの暮らしと商売の様子を述べた部分である。

---

[9] 延辺朝鮮族自治州は、中国東北・吉林省の東部に位置し、吉林省全体の約４分の１を占める。延辺は、延吉市、琿春市、龍井市、和龍市、図門市、敦化市という六つの市と安図県、汪清県の２つの県からなる。2001年の統計によると延辺の人口は218.8万人で、その中で朝鮮族が38.4％を占める。和龍は、今は県から市になっている。1993年９月和龍市になる。

[10] 1991年12月25日に74年に及ぶソビエト連邦における共産党一党独裁の社会主義体制および15共和国からなる連邦体制が崩壊し、ロシア連邦が生まれた。

ロシアでは夫と一緒に旅館に住んでいたよ。生活費が1日の稼ぎの5分の1もかからない。収入は決まっていないが、いいものを仕入れたら利益が多くなるし、また早く売れれば売れるほど、金回りが早くて利益が多い。物を仕入れるためにチタ[11]まで行く16日間くらいは収入がないからね。だから、売れるのが遅いほどその人は損が多いのと一緒。また、売り物を仕入れるのに半月もかかるので、物が3分の1くらい残ったらまたチタに行かなきゃならないから。だから、商売どころか食べ物を買うお金もなくなる人も少なくない。このような人は、教会に行ってキリスト教の助けを求める。教会に行ったら同じ中国人たちが、自分も大変だけど、その人に自分が仕入れたものをちょっとずつ渡すの。例えば、ある人がズボンを五つくれたとしたら、そのズボンの原価だけあとで返すことにするの。……仕入れも治安のこともあってひとりで商売するのはなかなか難しい、少なくとも2人でやらなきゃね。強盗が多いからさあ。

私たちはチェリャビンスク[12]というところにいたよ。ベトナム人もいたけど、ベトナム人は商売をちょっとするだけで、主に両替商をしていた。ベトナム人はみんな銃を持っていたよ。私たち中国人はほとんど服を売ってた。革服とか下着とか。ロシアにはもともと夏の服とか冬の服とかがほとんどなかったよ。私たちが行ったときが冬のころだったので、主に冬服を売ってたよ。ズボンだけで1日52個も売るときもあった。よく売れたね。ロシア人はものを買うとき個人でも一遍に何個も買うの。下着も1回に15枚も買う。また、中国人が売ってるのを買って中国人とかが少ないところに持って行って売る人もいた。……決して、安い価格ではなかったはずよ。だって私たちが住んでいた旅館で働いていたロシア人の1ヶ月の収入は私たちがズボン1つ売る値段だったから。服を買う人たちは一般の人たちだったし…私たちも最初は、中国からものを自分で持ってきたが、その後は、私たちが住んでいたチェリャビンスクと離れているチタという中国国境に近いところまで8日間かかって行った。そこには、服とかを中国から持ってくる人たちがいるから、その人たちから物を仕入れてくるの。主にジーンズとか革の上着、女性用下着とかだったよ。中国で中下級のものをこのようにロシアで売ってた。中国の30倍の利益があがるとよく言われたものだからね。確かにそうだったよ。物を運ぶとき、車を貸している人もいたが、途中でロシア人強盗に車を止められ、ものを取られたりした人も多い。私たちは汽車で物を運んでいたが、それも安全ではない。駅で働いている人がしたのか、物を包んでいたビニールが破られ、服も目に見えるくらい少なくなるの。しかし、それでも商売になるから、みんなそのようにして運んでいた。

ミハの記述で分かるように、ロシアでは衣服の需要が多かったため、当時物価より高いにもかかわらず、人々は衣服商売をしている中国人から個人用として一遍に大量に衣服を買ったり、商売用として仕入れたりしていた。中国人は直接の販売元でもあり、ロシア商売人・仕入れ業者の仕入先でもあった。これを継続可能にしたのは、ロシアにいる中国人向けに商品を提供する中国人仕入れ業者が中ロ国境地域に存在していたからである。中国

---

[11] チタ州（Chita）はシベリア南部に位置し、中国（国境線は998km）とモンゴル（同868km）に隣接する。

[12] チェリャビンスク（Chelyabinsk）はウラル山脈東麓のロシア連邦の都市。チェリャビンスク州の中心都市。シベリア鉄道の正式な起点。

人は仕入れのため、往復半月という時間をかけて中ロ国境まで行かなければならないので、そこで赤字になり生活も厳しくなる人も少なくない。教会ではこのような生活難に陥っている人たちのための中国人同士の互助的なコミュニティが形成されている。

治安が悪かったため、ミハと夫、姉は、結局1年後帰国する。商品の仕入れ・運びから日常の販売まで強盗が多く、ヤクザ同士の殺し合いを目のあたりにするほど治安が悪かった。

ミハの話から当時のロシアでの治安の悪さが伺える。

> ロシアでは危ない日々を過ごした。ヤクザが多かったの。彼らは一般の人には危害を加えないが、お互いに殺し合いもしたから。私は目の前で人が死ぬのもみたよ。怖かったな。毎日怖くて心臓が止まりそうなときも何回かあったよ。それで、私たちは、帰国することにしたよ。夫は最初同意しなかったが、私と姉の説得で賛成したの。

しかし、治安の悪さにもかかわらず、衣服商売は利益が多く、ロシアでの生活は豊かだったとミハはいう。特に、六日間衣服を売ったら1か月分の生活費が稼げるので必死に働かなくても贅沢なほどの食べ物を食べながら生活できるという。ミハの夫が最初帰国を同意してなかったのもこれが理由の1つである。また、これは大勢の中国人が治安の悪いロシアに残って商売を続ける理由でもある。もちろん残っている中国人のなかでも教会で他人の助けを受けながらやっと生活を維持している、帰りたくても帰れない人たちもいる。ミハの夫が帰国したがらないもう1つの理由は、個人的な理由であり、それはミハが行く前に一緒に商売・生活していた女性がいたからでもあった。仕入れも商売もひとりでは無理があるため、出稼ぎ同士特に男女が「協力」し生活商売を共にする例が少なくないという。

3-2　ミハの韓国における出稼ぎ生活

3-2-1　産業研修生としての生活

90年代初期は韓国政府が単純労働を認めていなかったため「非合法滞在」が増え、それにより政府の取締が厳しくなり、入国経路が狭くなっていた中国朝鮮族は、産業研修制度導入後、産業研修生として韓国へ入国する人が増えつつあった。1995年外国人登録した中国朝鮮族は7367人になり、そのなか在留資格が産業研修である人は6612人で、全体の90%を占めていた。産業研修のなかでも繊維製造業の産業研修生は一番多く、全体の25%を占めていた（法務部1995）。

ミハがロシアで稼いだお金は、家を1つ買ったら底をつき、経済的に困窮したミハは、お金を稼ぐために韓国へ出稼ぎに出る。1995年ミハは中国の青島から韓国の大邱にある繊

維製造会社に産業研修生[13]として働き始めた。ミハの会社は布の生地を作っていた。この会社には、韓国人以外に、中国朝鮮族6人、フィリピン人6人がいたそうだ。中国朝鮮族は6人とも女性で、フィリピ人には男性が2人いたそうだ。彼女と一緒に出稼ぎに行った中国朝鮮族の人たちは、糸を巻く仕事をしていた。

ミハたちは、朝8時から夜8時まで働いていた。昼の1時間の休憩を除いたら、毎日10時間も立って働いたことになる。ときには、機械が故障せず動いたら座って休憩できるときもあったというが、ほとんど立って働いていた。また、残業は出国時個人金融業者から貸した借金があるためできる限りしようとしていたという。

ミハは会社が準備してくれた寮でほかの中国朝鮮族女性たちと一緒に住んでいた。初期に入国した中国朝鮮族の大部分の人たちは当初、自分の生活空間を持てず、仕事をしているところで生活もしている人が多かった。ミハのような産業研修生は会社の寮で、建設現場で働いている男たちは現場で、行くところがない人は知り合いや親戚のお世話になっている。夫婦とも出稼ぎにでた場合も経済的余力がないため自分たちの部屋を探さず、一時期は離れて生活していた。その後の入国者の場合は初期の出稼ぎ労働者からの経済的支援があるので、生活は初期の人たちよりだいぶましになっている。ここでいう経済的支援とは、中国朝鮮族内での親しい友人・親族からの自主的な支援である。友人・親族ネットワークは、住まい、職業に関わるだけではなく、心理的な安定にまで影響を与えている。

ミハが韓国に来た1995年頃はまだ出稼ぎが始まったところだったので苦労する人が多かったという。個人の生活空間がない人が多かったため私生活はとても単純なものだった。彼らは異国の風景とか大都市の美しさを感じる心の余裕を持てず、大変な肉体労働と孤独な生活を甘受しながら暮らしていた（朴2006）。5歳の娘を国に残してきたミハも、当初は仕事が大変だったにかかわらず、娘や家族が恋しくて眠れず、涙が止まらない生活が1年以上続いていたという。

韓国の産業研修制度も日本と同様、低賃金、賃金未払い、長期間労働、職場事故、労災保険の不適用、暴行、セクハラ行為など問題をはらんだものであった。この制度の導入・運営以来、その非合理性が、必然的に大部分の外国人労働者を不法滞在者に転落させた。

産業研修の場合、働く時間の長さに比べ、給料がほかの飲食店員の半分くらいしかなく、一方借金の利子は毎日増えていく。ミハの場合、月4%の利子で個人金融業者から貸してもらった出国費用を返済しなければならなかった。だが、彼女が産業研修として行った会社での収入は、多いときで50万ウォン（5万円）、少ないときは30万ウォン（3万円）し

---

[13] 日本の産業研修生とほぼ同じ意味である。

かなかった。つまり、このままでは利子も支払いがたい。ところが、不法滞在者として飲食店で働けば月90万ウォン以上もらえる。このような給料、収入の差のため、ミハは韓国にきてちょうど1年がすぎようとしたとき、同じ部屋に住んでいた女の子と一緒に会社から逃げ出し、その女の子の現場労働していた兄のところに行った。この時点からミハの「非合法滞在」の出稼ぎ生活が始まることになる。

3-2-2 「非合法滞在者」として、3Kでの仕事

韓国にいる中国朝鮮族はほとんどが、「非合法滞在者」「外国籍労働者」として、いわゆる韓国の3K業種である工場、建築現場、飲食店、家事手伝いの仕事についている。個人の経済的理由以外に、非合法滞在の身分とそれによる賃金未払い、差別などの理由で韓国にいる中国朝鮮族出稼ぎ労働者は、社会の底辺に押しやられ、韓国社会での貧困層を形成している。

ミハは、建設現場の労働は繊維会社のときと比べると時間的には長くないが、大変さは繊維会社よりも上だったという。しかし、同じ現場で働く男の人の仕事の危険さは、手伝いをする女性とは比べものにならなかったようだ。建築現場で働いて1年くらいでミハは借金を返済する。入国して産業研修生として働き始めてから、建設現場で働いて借金の返済を終えるまでが、ミハが韓国という社会に「定着」する過程としてみよう。次に見るのは、建築現場での労働と生活に関する語りである。

現場で2年くらい働いたが、最初は、（産業研修）会社から逃げた身だから追われると言われて仕事もちゃんとできなかったよ。不法滞在だから、取り締まりが厳しい期間は家を出ることができなかったよ。でも、あとで現場の担当者が私にそこで働く証明書を作ってくれて違う名前で身分資格をもらった。それが身分証明書になって、それからは堂々と働けたよ。現場労働者と言えば仕事がハードなイメージがあるかもしれないが、私たちは女だから、男たちの世話をしたの。何かを持ってきてと言われたら持っていったり、壁を塗ったり。だから、男たちほどではなかったよ。楽だったよ。ただ、女が現場労働者として働くとちょっと見た目が（格好悪いから）ね、でも、給料が月120万ウォンか130万ウォンくらいだったので、えらくちがったわ、（産業研修）会社のときより。私が住む部屋の家賃の25万ウォンと生活費とか税金などの60万ウォンを除いて、残りは借りた元本と利子を払ってたの。結局、韓国にきて2年半くらいで、借金の返済ができた。私が前言った「顔を換えて」入国した友達も私と同じくらいのとき、返済が終わったの。彼女の場合は、親戚訪問だから、すぐ逃げたけど、韓国に入るときの費用がわたしの倍以上になってたから、その利子も加わって大変だったみたい。こうしても、ああしても、苦労するのは同じだ。借金を返済できてほんとうに生きてる感じがした。その前は、機械みたい、自分じゃなかったような気がする（笑）。

ミハが言っている「顔を換えて韓国に入る」というのは、親族の呼び寄せによってきたほかの人のビザをお金で購入し、書類を偽造して入国する方法の1つで、ビザが発行された旅券の写真を本人の写真に貼りかえるやり方である。

建築現場労働の不安定性と、約3年の滞在で韓国社会に適応したということもあって、彼女は2年ほどおこなっていた建築労働を辞め、鴨料理店、焼肉店など飲食店を転々とし、最後参鶏湯（サムゲタン）店に移ることになる。この参鶏湯店での仕事はその後韓国を離れるまで続けることになるのである。

韓国にいる中国朝鮮族出稼ぎ労働者は仕事場をよく移す。つまり、流動性が高い。それについては、彼ら個人、職場などいろいろな理由が挙げられる。また、不法滞在者という立場のため、身元を隠し、人に自分の状況をすぐ話そうとしない。ミハの場合も最初の産業研修から4回転職した。

3-2-3 「非合法滞在」時の家族生活

ミハは、「非合法滞在」身分として、約8年間継続で、家族3人が3国でバラバラの生活をしていた。

その間、ミハの送金は、借金返済用だけではなく、中国に残した娘の生活・教育費・家購入などでの唯一そして大事な財源でもあった。家族への送金は、初期はブローカーを通じたが、その仕組みというのは、韓国側にいるブローカーにウォンを払うと、その場で中国側のブローカーと連絡し、親族が直接当日為替よりちょっと低いレートで人民元をもらえたそうだ。ミハも初期はこのブローカーを利用したり、知り合いに頼んで中国帰りに現金を送ったりしたが、「非合法滞在」の後半は結婚ビザとして韓国へ入国した姉妹名義で送金したりしたという。

ミハにとって、韓国での生活で、一番辛かったのは小さい娘と離れ離れになったことであった。来たばかりのときは、特に、お金もなく国際電話もできないため、仕事が終わった後、毎晩泣いていたという。いくら仕事が大変でも娘のことを考えると眠れなかった時期が長く続いたそうだ。借金を返済したあとは、余裕ができ、毎週2回くらいは娘に電話をするようになり、ようやく心が落ち着つくようになったという。しかし、道で娘くらいの子供が両親の手を握って微笑んでいるのをみたら、胸が痛くてたまらなかったという。確かに、ロシアに行っていた期間も合わせれば、娘とまともに暮らせた時間はわずか1年半くらいである。インンタビューした時、ミハはすでに韓国での「非合法」出稼ぎ生活も10年になろうとしている。母親にとってこれほど辛いことはないだろう。

しかし、娘の成長とともに、ミハは母親としての限界を感じはじめている。

娘が小さいときに電話すると、幼稚園の話をよくしてくれたが、大きくなってからは、だんだん話題が少なくなってきた。おしゃれをするようになってからは服とか靴とかを送ってきてという話以外は、あんまり話をしてくれなくなったの。でも、仕方がないね。このようなことはわかっていて韓国にきたんだもん。少なくとも経済的にはほかの子に負けないようにさせたかったので、それができるだけでも満足。それに、姉がしっかりもんだから、娘も悪い道に走らず、ちゃんと学校に通っている。これだけでも満足してる。私が中国で娘と一緒ならもっとよくなったともいえないしね。

ミハは、自分が子供にできることは、経済的支援だということに非常に冷静な反応をみせていた。もちろん、子供に寂しい思いをさせた申し訳ない気持ちと親としての多少の悲しさは見えるが、それより自分の今の役割に満足しているようにみえた。

夫とは直接の連絡はなく、親戚を通して安否を聞くくらいだった。ミハと夫は、お見合いで知り合い、自由恋愛を通じてお互い相手の気持ちを確認して結婚したカップルである。同じ村から都会に出稼ぎに出ている人だったからか、とても話しが合ったという。ミハは最終的に夫と結婚を決めたときも自分の意思で決めている。また、ロシアまで追って行きほかの女性と生活商売をしていた夫を取りもどしたのも、自分の意思で決めた結婚なので、自分でこの家庭を守らなければと思ったからであったという。しかし、中国社会の劇的な変化と出稼ぎの長期化による人の価値観、人生観の変化によって、再びこの家庭は試練を受けることになる。

3-3　家族に関する選択

滞在時間が長くなるにつれて、中国朝鮮族の家族や婚姻などの私生活でも変化が現われはじめる。たとえば、中国に夫ないし妻がいる男女が韓国で同居という形を通じて、家族生活の空白を埋めようとしている現象が出現する。これは、儒教文化の家庭観念の影響を強く受けている中国朝鮮族社会に大きなショックだった。しかし、表面的には今までの倫理道徳から問題視されるマイナスイメージのようにみえるが、実際のところは、このような<新しい家庭>を作ることにより、仕事からのストレスが発散でき、韓国での心の居場所が新しく生まれ、韓国での生活適応にも大きな役割を果たしたことも確かであろう。中国朝鮮族は、中国で形成された生活文化を土台に、韓国という「不自由な異世界」において、自分たちの新しい生活世界を形成しようとしている。

ミハも、韓国での10年にわたる出稼ぎの生活のなか、価値観、人生観が、韓国社会のなかで、大きな変化があった。しかし、ミハはこのような変化を通じて、別の人生を選ぶのではなく、たとえ夫、子どもが3つの世界に分離して生活するとしても、もともとの家

庭を守ることに価値を置こうと決意する。次に見るのはミハの家族選択を述べたものである。

韓国にいた間、ずっと夫のことを忘れてなかった。友達から若いうちに新しい人を探さなきゃといわれ、紹介もしてもらったが、それは、そんな簡単なもんじゃない。私と同じ長年韓国にいる人で、夫婦で来てない人の半分くらいはここで新生活を始めたが、私にはそれが無理だった。また、夫とは、お互い夫の親戚を通じて安否が分かっていたが、先月、（ロシアにいる）夫から直接電話がきてさあ、一緒に帰ろうと言い出した。人生思ったより長くないし、娘のためにも、これからの人生のためにも、夫とやり直したほうがいいと思ったわ。だって、今さら、再婚なんかするとしても、どうせ結婚した人か子持ちかだし。娘に悪い思いさせたくない。

2007年に訪問就業制が整備されて以降、韓国への出稼ぎの道がすこしずつ広くなり、中国と韓国の行き来が比較的自由になるにつれて、＜新しい家庭＞は事実上意味をなくし、徐々に減少したとも言われているが、現況は不明であり、今後の調査が必要である。

3-4 ミハの意識変化

ミハは10年ちかく韓国で出稼ぎをした。彼女が出国した1990年代初めでも、中国朝鮮族にとって成功の基準は、お金を多く儲けることより、勉強ができて大学へ行くことや、国家公務員やその他の事業（出版、教育、言論などに関わる機関）に就職することだった。すなわち、成功の基準としては、経済的成功より社会的地位上昇に対する関心が優勢だった。親たちは自営業によって経済的収入が多くても子供には自分のような事をさせないで勉強ができて「出世」することを希望していた。周囲から羨ましがられるようないわゆる成功した人とは富を築いた金持ちより勉強ができて良い大学へ行ったとか、社会的に認知された機関に就職した人々だった（韓サン福・権太燗1993）。ミハ自身も韓国にきたばかりのときは、子供が自分とは違って、大学に進学して「出世」してほしいと願ったものたが、韓国での10年の出稼ぎ生活のなかで、社会的「出世」への価値は減少し、経済的成功こそが人生のゴールであるという意識が強くなってきたようだ。

韓国の人たちは、私たちと違う。子供のときから資本主義に染まっていて自己中心なの。他人に配慮することをしらない。食べ物でも、いいものがあったら自分で食べるだけ、人に勧めない。自分が腹いっぱいになったら、人にすすめるの。人前では、優しいけど、裏ではそうじゃない。一所懸命必死で働いても、誰かに密告で強制帰国させられるときも、店のオーナーは、帰国する前に一銭も[14]余分にあげないの。すごくなかよく仕事したのに、あの人たちは仕事をやらせると

[14] 中国朝鮮族の人たちは、「ちっとも」の意で、「一銭も」と用いることがある。

きはやさしいけど、もう国に帰るとしたら、どうせ帰国しちゃうので、自分になんのメリットもないと思うみたい。それに、私たちが彼らが考えていることを知らないと思っている。……私たちが朝鮮族だからではなく、たぶん彼らは親兄弟に対してもそうだよ。子供のときからの習慣だから治らない。ないものは下にみる――そのような世界だわ。上の人間にはなんでもかんでも「はい、はい」という。言い訳したらだめ。・・・店にはほかに中国朝鮮族もいるが、韓国に来たばかりなのが原因なのか、働きぶりがよくない。することがあんまりなくてもぼっとするのではなく、雑巾でなんか拭いたりしなきゃね。今思うと中国朝鮮族は来たばかりの時、それでよくしかられたりするのよ。個人の習慣の問題があるかもしれないが、それより、中国という社会と韓国社会の違い、中国では、早く仕事が終わったら人より早く休めるとか、やることがないのにやるふりをする人はいい目でみないとか、あるよね。韓国人はやることが終わっても社長の目を意識し、同じことを何回か繰り返すが、中国朝鮮族は、やってた仕事が終わったら何にもしないの。だから、最初は、よく言われるの『中国人は、怠けものだ』とか。

ミハのインタビュー内容は、ミハのもう1つの意識変化即ち同胞から他者への変化である。すなわち、同じコリアンの血が流れている同じ民族であることだけを強調した従来の同胞意識から、異なる社会環境で育った価値観が全く異なる他者である意識への変化が起きた。被害者意識だけが強かった従来と比べ、最近は韓国社会自体を理解しようとし、そのうえでそこで生活している人間を考えようとする中国朝鮮族出稼ぎ民が増えてきているようだ。従来の「韓国人は私たちを見下している。」という単純な反発や怒りから、「違う社会で成長した韓国人は、見た目は似てるようにみえるが、中身は自分たちとは同じではない。仕事、責任に対する理解が違う。つまり価値観、人生観が違うのだ。」という韓国に対する「異界認識」の誕生をミハの意識のなかに見ることができる。このように、韓国人への見方が、同胞から他者へ変化することによって、同胞と考えればなら傷つくことが、まったくの他者であるならそうでもなくなる、という認識の変化が生じたように思われる。

3-5　ミハの帰国

2002年日韓ワールドカップ特別政策として、密入国者を含む「非合法滞在者」が自己申告する場合、出国猶予期間を設け、その間自由就労活動をすることが可能になった。これを利用してミハは、指定期間内に入管に自己申告し、その後2003年11月自発的に帰国した。

1995年ロシアへ再出稼ぎに行って音信不通だった夫とは2002年ようやく直接連絡がつき、夫婦関係を修復することを約束した。夫が先に帰国し、その後ミハも帰国し、家族と10年ぶりに再会することになった。

4 家庭関係の再構築

2003年11月、ミハは10年の韓国での出稼ぎ生活を終わらせ、中国に帰った。夫は1ヶ月前にすでにロシアから中国に帰って、彼女を待っていた。

ミハ一家は、ミハが韓国で出稼ぎをしていたとき買ったアパートで暮らすようになった。お互い年を取っていることにとても感銘を受けたという。お互いいろいろあったけど、これからやり直そうと決意を語りあったという。夫婦関係は表面上は回復した。

娘との関係は、当初、娘からの拒否という困難に直面した。姉夫婦と比べられミハ夫婦を拒否した。

> 最初は3人でいるのがすごく不自然な感じがした。私と夫はすぐ昔のようになったが、娘は私たちに心を開かなかった。料理がおいしくないとか、おばさん（大姉）の料理がおいしいとか、おばさんの家ではこうなのに、この家ではそうじゃないとか、文句が多かった。悲しかったけど、反面姉の家でなんの不自由もなく育てられたのを身をもって感じたので、うれしかった。だが、ちょっと気にいらなかったら（娘が）姉の家に行くことを、(母親として）あんまりよく思わなかった。姉にも協力してもらって特別なことがない場合は姉の家に行くのを禁止するようにした。姉の話はよく聞いたからね。また、高校の入試試験もあるし、ちゃんと家で勉強しなきゃ。

結局、姉夫婦の協力のもとで、強制的に3人で暮らすことにしたが、関係は最初よりはよくなっているという。

5 再出稼ぎ

中国朝鮮族のなかには再出稼ぎをする人が非常に多い。中国では職業がなく定期的収入を確保できないので、結局再び出稼ぎにでる人が増えていく。ミハの語りから、次の4点の再出稼ぎの理由が明らかになった。

1. 中国での消費レベルの上昇
2. 定職につきにくい就業環境
3. 将来への不安－医療保障・退職金など社会保障が不完備
4. 煩雑な親族・友人内の人間関係に疲れ

ミハが帰国した当初は、友人と親戚が彼らのために開いた食事会に参加するだけでも大

変だったという。もてなしてもらうばかりでは礼儀に反するので、こちらももてなさければならない。このようにして最初の3ヶ月がすぎたという。帰国して1年がすぎた現在、ミハは切りがない友人、親戚との往来に疲れている様子だった。現在ミハの最大の悩みは、あれこれ多い行事のため、お金はなくなる一方で、収入はまったくないことだという。稼いだお金を確保し、早く、現在おかれている状況から脱出したいと彼女は言った。ミハは、完全帰国というつもりで故郷に帰ったが、このままでは再出稼ぎを図らざるを得ないだろう。

> 誕生日だ、祭り日だと、もう毎月行事がある。呼ばれてるから行かないわけにもいかない。行かない人もたまにいるんだけど、そうするとその人は次からみんなから疎外される。呼んでいるのに、基本的な礼儀もわきまえないと指を指される。これが回り回って切りがないの。毎月なんか行事があるから、お金は大変よ。それに、半分以上が私たちのように出稼ぎから帰った人なので、みんな暇をもてあましているの。このままでは無理だ。

この中で出ている色々な行事は、延辺地方独自の人間関係に関わる習慣である。経済的にも、精神的にも負担が多い帰国生活は、完全帰国のつもりで故郷に帰ったミハを、再び出稼ぎの岐路に立たせる。

2008年、ミハは中国・旧ソ連同胞を対象にサービス業などで就労を許可する同胞優遇制度である訪問就業制を活用し、今度は夫婦で韓国へ再出稼ぎに出る。

娘は再び姉へ預けることになり、これで合計11年以上姉が娘の面倒をみていることになる。

ロシアの出稼ぎ時代も含めると、約13年家族が別居状態になる。しかし、長い別居生活しているにもかかわらず、家族は崩壊したのではなく、家族成員の間は強い紐帯で結ばれ、新しい家族形態を形成していた。このような別居生活は、厳しい現実を克服・改善する最短で唯一の方法でもあり、現時点で必要な戦略的選択だったと肯定的に評価したい。

6　おわりに

本稿は、ミハというひとりの個人のミクロな生活経験に密着することを通して、国境をまたいでひとりの人間が複数の国民国家内で異なる生活世界を構築していく困難と技法を明らかにしようと試みた。

今までの朝鮮族の移動研究では、アイデンティティをめぐる研究が多く、また家族に関する研究は危機論的な悲観的視点が主であった。筆者は、短期間のあいだに、トランスナ

ショナルな移動生活を身につけた中国朝鮮族が、複数の国でお互い関係しながら自分たちのより良い生活を作って行く生活戦略を見ようとしてきた。

ミハの事例は、10年という長い間、3つの地域で別居生活しながらも、1つの家族を維持し、共同の想像世界の中で家族生活を継続、維持しているトランスナショナルな新しい形の家族像の出現を表していると言えるだろう。現実に色々な問題があるにせよ、子供や夫などの家族との紐帯を切断するのではなく、精神的な紐帯を維持しながら、各人に犠牲を強いるなかで家族を構成していく。

ミハの事例は特別な例ではなく、トランスナショナル移動により、中国・韓国・日本などにそれぞれ居場所を持ちながらつながって行く家族の形態は、中国の市場経済導入後、無数のミハを生み出してきている。従って、ミハの経験を研究することは、ある意味で現代の中国朝鮮族社会の一面を深く知ることになるだろう。

最後に、今後の課題についてすこしだけ触れておきたい。

今回は主に韓国での出稼ぎ者を調査対象にしているが、今後、移動しない人たち、中国国内に残って出稼ぎ者の生活とつながっていく人々の生活世界を研究する必要があるだろう。

中国朝鮮族人口のかなりの部分が、「出稼ぎ」によって韓国社会を体験した。このような「出稼ぎ」が中国朝鮮族社会に対して与えた影響は少なくないし、また将来にわたって彼らの「出稼ぎ経験」が、さまざまな側面でどのような影響を及ぼすかは今後の研究課題でもある。特に、子供の教育問題・高齢者の介護問題に焦点を当てようと思う。

韓国だけでなく、日本、ロシア、アメリカなどに拡張する朝鮮族のトランスナショナルな生活世界の全体像を把握する研究が必要である。

参考文献

石原昌家, 2002,「超境者のライフ・ヒストリー」谷富夫編著『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 31-61.

韓国法務部, 1995,『出入国管理統計年報』出入国管理局.

————, 2011a,『出入国・外国人政策統計月報』1月号　出入国外国人政策本部.

————, 2011b,『国籍別在留外国人現況』2011年2分期　出入国外国人政策本部.

Geertz, Clifford, 1973, *The Interpretation of Cultures*, Basic Books. (=1987, 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘充・板橋作美訳,『文化の解釈学』Ⅰ・Ⅱ　岩波書店).

吉林省人口普査弁公室編, 1992,『吉林省2000年人口普査資料』中国統計出版社.

————, 2002,『吉林省2000年人口普査資料』中国統計出版社.

権香淑, 2011,『移動する朝鮮族——エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社.

権太燗, 2003,『中国朝鮮族社会の変化——1990年以後を中心に』ソウル大学社会発展研究所.

権太燗・朴光星, 2004a,「国内朝鮮族社会適応と政策：朝鮮族労働者集団の形成」崔ヒョブ・金セン国・鄭グンシキ・ユミョンギ編『韓国の少数者、実態と展望』ハンウル, 424-444.

————, 2004b,「中国朝鮮族大移動と共同体の変化：現地調査資料を中心に」『韓国人口学』27（2）：61-89.
国務院人口普査弁公室編, 1993,『中国 1990 年人口普査資料』中国統計出版社.
————, 2002,『中国 2000 年人口普査資料』中国統計出版社.
小林多寿子, 2002,「インタビューからライフヒストリーへ」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂 , 43-70.
ソルドンフン, 1999 ,『外国籍労働者と韓国社会』ソウル大学出版部.
————, 2000,『労働力の国際移動』ソウル大学出版部 .
中野卓, 1977,『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』御茶の水書房.
————, 1981,「戦中戦後日本社会学外伝 9[終り]——最後のコミュニケーション [有賀先生の手紙]」『書斎の窓』300: 30-33.
中野卓・桜井厚編, 2003,『生活史の研究』中野卓著作集生活史シリーズ第 1 巻　東信堂.
————, 2002,『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
朴光星 , 2006,『グローバル時代中国朝鮮族の労働力移動と社会変化』ソウル大学大学院社会学 2006 年度博士論文.
————, 2010,「トランスナショナルな人口移動と中国朝鮮族のグローバルネットワーク」『在外韓人研究』21:357-375.
韓サン福・権太燗, 1993,『中国延辺の朝鮮族』ソウル大学出版部.
韓美蘭, 2009,「中国農村労働力の民族別移動に関する一考察——吉林省の場合——」『中国経営管理研究』9: 1-24.
————, 2010,「中国における労働力送り出し地域の民族別移動とその決定要因——吉林省の漢族と少数民族の場合——」『アジア研究』56（3）：30-44.

（きょ　えんか・博士後期課程）

A transnational life on the move for the Korean-Chinese: the life history of a migrant working woman in South Korea

Yanhua XU

Nowadays, the number of the migrant workers in South Korea is said to exceed 450,000 people. They constitute around 60 percent of the Korean-Chinese population that has moved overseas.

As a result of the high rate of demographic shifts in the Korean-Chinese population, it is expected that an individual will build a different life-world in two or more nation-states after crossing the borders of those countries.

In order to consider such a situation, it is necessary to adhere to an individual's micro-life experience of an individual. Therefore in this paper, I decided to focus on the migration history of a woman born in Yanbian.